

氏 名	しま だ たま み 嶋 田 珠 巳
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 390 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	Grammatical Description of Hiberno - English from a Dynamic Perspective : A Sociolinguistic Approach (アイルランド英語の動態的文法記述——社会言語学的アプローチ)
論文調査委員	(主 査) 教 授 田 窪 行 則 教 授 吉 田 豊 助教授 家 入 葉 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はアイルランド英語 (Hiberno - English, 以下 HE), とくにその南西部方言 (Southwest Hiberno - English, SwHE) の動態的観点からの言語学的記述である。HE は基層のアイルランド語と上層の英語の長期にわたる言語接触により形成された言語であり, 現在は標準英語 (Standard English, 以下 StE) などの主要な英語変種との部分的な収束をみせながら急速に変化しつつある言語である。

本論文において「動態的」(dynamic) とは, 言語体系の記述に文法変化の要因と方向性を視野に入れることを意味する。HE は StE による規範意識からの影響を受けるのが常態であり, それらを排除した形での記述は不可能であり, HE がつねに変化しつつ在るという認識を言語の記述に導入しなければ十全な記述ができないという立場にたっている。

このため本論は本質的に社会言語学的な研究であらざるをえず, HE の言語記述に, 言語外現実や言語外要素を捨象した形で言語について考察し, 言語体系を記述することはできない。このような観点から, 本論は社会的存在としての母語話者を軸とした記述を行っている。言語形式とそれが表す言語機能の関係のみならず, 形式の言語外意味 (extra - linguistic connotation) をも含めた話者の知識の総体として文法を考え, これを記述の対象とするという方法を取っている。

一般に言語学では方言とみなされている言語であっても, それはひとつの独立した言語体系として記述される。しかし, これまでの HE 研究ではもっぱら StE との対照によってその文法特徴を明らかにする方法がとられ, StE における文法諸範疇と形式・機能連関に関する枠組みが無批判的に用いられてきたと言える。HE は既存の研究では StE との対照によって記述されてきたため, HE にみられる StE と類似の表現はその言語範疇あるいは文構造の表層の変異形として扱われてきた。本論で論者は HE の言語形式そのものの分布を詳しく見ることで, HE 固有の体系を抽出することを目指している。この試みは, 本論において, StE の分裂文と類似した *tis* (～ *it is*) …文にたいする非・分裂文分析 (第 3 章) とテンス・アスペクトに関する諸形式に関する個別言語的な記述 (第 4 章) に一端が示される。

一方で, HE 話者は StE を常に意識せざるを得ないという現実が存在する。このため HE 話者は自らの言語のアイルランドらしさに関する意識 (awareness of “Irishness”) と正しさに関する意識 (awareness of “Standard”) を同時に持って言語生活を行っている。この観点から本論においては, 諸形式の統語的, 形態的記述とともに言語外意味の記述を行い (第 5 章), 言語接触を誘因とする言語変化の考察という視点から, HE の文法が StE のそれに対して独自性を持ち続ける場合とそうでない場合, 及び, 両者が何と相関しているかの解明に手がかりを与えようとしている。このように本論の主旨は, HE 文法の独自性の例証と母語話者の言語意識を中心とした言語記述であるとまとめられよう。以下, 各章の構成について述べる。

第 1 章では本論の基本となる観点について, これまでの研究を参照しながら論じる。とくに接触言語理論において単に受動的な学習者と見なされてきた下層語の母語話者を創造者として捉えなおし, 言語に関する知識を形式と意味との連合のみならず, 当該言語形式の社会的意味をも含めた話者の知識の総体として考えるという本論の基本的な立場を示している。第

3～5章における言語現象の分析の基礎づけとして、文法性判断と話者の言語直観および知識との関連が考察され、形態・統語法に関する動態的記述のための方法が検討されている。従来の研究に見られるような HE を英語の方言連続体においてとらえることの問題点、言語変化の言語外的要因の存在の可能性が指摘される。さらに形態・統語法を動態的な観点からいかにして記述するかといった問題を社会言語学的方法を踏まえながら論じ、本論の基礎としている。

第2章ではアイルランドの言語状況、HE の形成と背景、本論が記述の対象とする SwHE について概説される。これまでの HE 研究の経過を主要な先行研究を概観しながら述べ、その後 HE の主要な特徴を音韻面、形態・統語面、語用法的側面からそれぞれ整理している。現代アイルランドにおいてアイルランド語と英語はともに重要な言語である。前者はもはや単一言語話者のいない言語であるが、アイルランド社会において文化資本として尊ばれ保持されている。アイルランド語から英語への言語交替の要因はおもに16～17世紀以降のイングランドからの入植によるとされ、この時代の英語が HE の上層であると考えられる。ただし、当時のアイルランド語単一言語話者の多くは、イングランド人との接触よりもむしろ既に英語を習得したアイルランド人との接触によってバイリンガルとなったことに留意されるべきであることを論じている。

第3章では論者が *'tis*(*~ it is*) …文と呼ぶ構文について論じている。この構文は標準英語の分裂文と形式的な類似をみせていても、文を構成する諸要素の性質と機能、および情報構造に違いがある。*'tis*(*~ it is*) …文が、焦点化構造(「It is X that Y」[StE] / 「YなのはXである」)をとる分裂文ではなく、命題にたいする話者の主観性の関与を表すモダリティ要素とその補文節から構成されているという論点のもとで、当該文に関する考察を「非分裂文分析」(“non-cleft” analysis)としてまとめている。

分裂文との相違を明らかにするため、*'tis*(*~ it is*) …文が卓立性(salience)と名づける概念との関係において記述されている。卓立性は、前提が設定する問いに答え、それ以外を排除する機能を持つ焦点(focus)とは独立的に定義され、文の統合関係における情報の重要性を表す。*That* の生起を中心としたデータの分布(*that* のある形式は X=Subj-NP, PP, AdvP の場合にのみ表れ、AdjP, Non-finite VP, Obj-NP では表れない)に着目し、*'tis*(*~ it is*) の補文節において卓立性を担う構成素がある場合には、(i)有標の語順、(ii)韻律的強調、(iii) X=Subj-NP など統語的有標性を語順で示すことができるか、あるいは、不十分であれば、さらに *that* の付加によって、その卓立性を表示していると分析している。

HE の情報構造に関する言語表出手法、とりわけ情報の卓立性を表すシステムは、*'tis ~ it is* …構文の文頭に多くみられる倚辞化した形式(*'tis*, *'tistn't*, *'twas* など)の機能とともに、HE が StE の分裂文による焦点化構造と同一の統語的分布と意味機能を持つものではないことを示し、HE を自律的体系として記述している。

第4章では HE のテンス・アスペクトに関して、これまでの研究を検討したうえで問題点を指摘し、HE の形式に基づいた分析を行う。本章においてはとくに、完了の意味を表すとされてきた *be V-ing AdvP* (durative) と *have* 完了形の意味の分布、*have* 完了形と *be after* 完了形の語用法分布、習慣相を表す *do be* 形式の意味を中心に記述しながら、現代の SwHE のテンス・アスペクト体系についてこれも自律的体系として記述を試みている。

第5章では HE 話者の二つの意識—「アイルランドらしさ意識」(awareness of “Irishness”)と「スタンダード意識」(awareness of “Standard”)—について、HE 話者の言語観に関するアンケート調査(N=103, 1999年)と2006年までのフィールド調査において得られたインタビューなどをもとに示す。さらに言語形式に関する HE 話者の意識調査(N=64, 2006年)の結果をもとに、語順転倒文、分裂文とそれに類似する文、*there* …文、*do be V-ing/AdjP* 形式、*be after V-ing/NP* 文、完了を表すとされる *be V-ing AdvP* 文、倚辞化形式(e.g. *amn't I ~ ? / 'twouldn't*), [main clause] and NP V-ing 構文、語彙(*craic*, *amadán*, *cnamhshealing*)に対する当該母語話者の主観的評価を「使用・不使用」、「不理解」、「アイルランド的」(“Irishness”)、「悪い文法」(“bad grammar”)の5項目において調査した結果を示す。話者の意識において有標・無標な特徴および好ましい・好ましくない特徴があること(e.g. *They are visiting here many years.* は無標、*How's the craic?* は好ましい特徴、*She does be lovely with her long hair.* は好ましくない特徴)、語彙特徴に際立つ「アイルランド的」評価、*do be* に際立つ「悪い文法」評価などの各々の集計結果を概観したうえで、それぞれの特徴を話者意識の観点から記述している。同一文法特徴項目における相違、地域差(Kerry 県 Listowel と Cork 市)、世代差、話者態度などにも触れる。

第6章では HE の言語的混成性(linguistic hybridism)に関して、まず、HE 特有とされる語彙および *do be V-ing/*

AdjP 形式と *be after V-ing/NP* の形成過程を基層のアイルランド語との関係の視点から考察する。HE の話者意識における “Irishness” と “Standard” の接点は、基層のアイルランド語からの影響の下に形成された HE 成立の歴史的背景を映しだしていると捉えられる。HE 研究が無視することのできない、“*Good in Irish, bad grammar in English*” といった当該言語話者の意識についてもポスト・コロニアルの論点から論じている。

最後に本論全体の総括として、HE の言語的特性と話者意識について言語と民族的アイデンティティの論点から述べ、第 5 章にみたアイルランド的であると話者に意識される言語形式の使用を通して、民族的アイデンティティの意識が言語体系に働きかけていること、さらに、第 3～4 章で論じた HE 文法の自律性は当該言語が民族的独自性を表出する潜在性を根底において支えていることを示唆している。

論文審査の結果の要旨

本論は、アイルランドで話される Hiberno English（以下 HE）とよばれる言語、特にその南西部方言について社会言語学的な記述を行ったものである。

従来 HE は英語の一方言とみなされ、標準英語との比較によって記述されることが多かったが、論者はこの言語を支配者の言語である英語と基層のアイルランド語との混合言語がクレオール化したものと見る立場にたち、英語とは基本的に独立した言語として記述を試みている。HE は、基層となるアイルランド語からの影響をうけながらも、話者たちは学校教育で使用される標準英語やマスメディアで使用されている米語などさまざまな種類の英語にさらされている。HE の母語話者はほぼ例外なく標準英語の話者でもあり、かつ、これら 2 言語はある程度相互理解が可能であるため、HE の話者はつねに両者の違いを意識せざるをえない。論者は、HE の構造のうち、どの部分が母語話者によって意識され、どのような社会的価値判断が付与されているのか、また、これらの社会的な価値判断がどのような形で言語使用ひいては言語変化に影響を与えているのかを、データベース、個人面談、アンケート調査、などの社会言語学的手法で明らかにしている。

全体は英文で本文 333 ページ、6 章よりなっている。1 章では、本論文で採用される方法論、データが述べられる。2 章では、HE の基本的な音韻、形態、統語論的記述を従来の研究のまとめという形で行っている。3 章では従来分裂文として扱われた構文を非分裂文として扱う提案を行っている。4 章ではアスペクト・テンスの構造を記述し、従来の分析の代案を提示した。5 章では、3 章、4 章で扱われた構文、語彙など 16 項目について HE の母語話者の言語意識を調査している。HE の母語話者が、これらの項目のうちどれを、アイリッシュ的なもの、標準英語的なもの、また、文法的に望ましくないものとして意識しているのか、自分で使用するか否か、理解できるか否か、についてアンケート調査を行い、各々の集計結果を概観したうえで、それぞれの特徴を話者意識の観点から記述している。同一文法特徴項目における評価の異同、地域差（ケリー県リストウェルとコーク市）、世代差、話者態度などにも触れる。6 章は本論文全体の総括として、HE の言語的特性と話者意識について言語とアイデンティティの論点から述べている。

論者の方法の特徴は第一に HE を英語の方言としてではなく、独立した言語としての体系的な記述をめざしたことである。従来の研究は他の英語、特にイギリス標準英語との対比により、HE の特徴を拾うという手法をとるものが多かったため、論者の方法はより体系的な言語学的記述となっている。第二に、社会言語学的研究の前提条件として、精密な統語論的記述がなされていることがあげられる。論者は取り扱う統語論的な構造を社会言語学的考察とは独立して論じ、しかる後に、母語話者がその構文に対してどのような意識を持っているかを社会言語学的手法により調査を行っている。3 章で論じられている *'tis* 構文に関する論述は特に優れている。この構造は従来標準英語で行われているいわゆる分裂文に対応するものとして記述されてきた。論者は、HE のこの構造は分裂文とみなすべきではなく、構成素を節頭に移動させた有標の語順の文に、*'tis* というモダリティ要素をつけたものであること、また、*that* は補文化辞ではなく、主語や副詞句のようにもともと節頭に来る要素がこの操作を受けたことを示すための標識のために挿入されていることを大量のデータから明らかにした。この論述は非常にすぐれたもので、これまでの通説を覆し、HE 統語論に対して大きな寄与をしたものとみなすことができる。4 章で論じられたテンス・アスペクトシステムの記述も精密である。HE におけるテンス・アスペクト形式は、これまで標準英語の対応する形式が表す機能からのずれに着目して、記述されてきた。論者は、HE のテンス・アスペクト形式そのものの機能を体系的に記述している。

前述のように、HE と標準イギリス英語はある程度の相互理解性を持つため、HE の持つ構造を独立して取り出すことは非常に難しく、論者のように精密な統語記述を下にした言語意識の調査はまれであるといっていよい。この点は高く評価される

以上のように、本論は標準イギリス英語とは独立した HE 独自の体系を取り出すのに一部成功しており、HE の研究を大きく進めたものとして評価できる。しかし、欠点がないわけではない。まず第一に従来の研究が標準英語との比較を重視してきたためか、本論においても必要以上に英語との関係を考慮にいれ、体系的な記述をそこなっている部分が散見する。また、反対に、HE を独立した体系として記述しようとしたため、構文成立の契機としての基層のアイルランド語の影響に関する言及が不十分と見られる個所もある。しかし、これらは今後の研究の発展により、十分補えるものと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2007年1月31日、審査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。